保育者養成における稲作体験

―大学生の京丹後での農作業体験の事例から―

野口　聡子、羽溪　了、福田　豊子
（龍谷大学短期大学部こども教育学科）

概要：研究の背景と目的

こどもの健やかな発達にとって、食は重要な役割を担っている。こどもの育ちに係わる保育者にとっても食育は必要不可欠なものとして位置づけられる。

保育者養成課程において、大学生は食に関するいくつかの授業を受講する。本学短期大学部こども教育学科においては、3年前から「こども米プロジェクト」を立ちあげ、キャンパスで稲を育てるようになった。プロジェクトに参加した学生は、収穫した米を使ったレシピを開発したり、京丹後市で農作業を体験したりした。

京丹後市での農作業は地域連携の一環でもある。3年前から京丹後市と連携協定を結び、「京丹後市夢まち創り大学」の一環として、京丹後市奥大野地区の「楽農くらがき」のメンバーを紹介いただき、実際の農作業を体験させていただいた。「楽農くらがき」のメンバーと農作業後にディスカッションを実施し、実際の農作業での工夫など今後の就職先で食育を実施する場合のヒントになるような事柄を得られている。

国立青少年教育振興機構の調査によると、自然体験・生活体験・お手伝いは、こどもの自己肯定感を高めることがわかっている。また、栽培体験が心身の健康を増進することを示す農林水産省の報告書もある。これらの先行研究の結果をふまえ、稲作体験が大学生にどのような影響を与えるか明らかにしたいと考えた。

研究方法

キャンパスの一角にコンテナをおき、苗を植えた。稲に生育していく様子を観察・スケッチする課題を 2023 年度、保育内容「環境」に関する授業で出した。学生が提出した感想を分析した結果、稲作体験による学びの効果が認められた。

その結果をふまえ、2023 年 9 月に京丹後市奥大野で農作業を体験した学生・卒業生が、稲作体験から何を学んだか考察したい。そのために、学生・卒業生の現地での様子、その後のプロジェクトへの向き合い方などを振り返る。

考察および結論

京丹後市奥大野での農作業に前年度参加した学生・卒業生のうち、3 名が 2023 年 9 月にも参加した。再度の参加ということだけでも、稲作体験への興味・関心を認めることができる。さらに現地での作業においても、強い熱意を感じることができた。先ずその様子を紹介する。次に、保育内容「環境」に関する授業を受講した 1 年生に対して、キャンパス内での稲作体験を観察させた感想を分析した結果を以下に報告する。

１）保育内容領域「環境」のねらい・内容と稲作体験との関連

保育内容領域「環境」は五領域の一つであるが、稲を育てたり、観察したりするという活

動は、領域「環境」のねらいと内容に関連していた。

領域「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」領域である。三歳以上児の場合、そのねらいは次の 3 つである。

① 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
② 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
③ 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

今回、稲の観察・スケッチによって、学生の好奇心や探求心が刺激されることがわかった。キャンパスという身近な環境の中で身近な食材である稲の栽培を見ることは、領域「環境」そのものの学びに直結しているということがわかった。

また、三歳以上児の場合、領域環境の内容は次の 12 項目あるが、その 1 番目、2 番目、3 番目、4 番目、5 番目は次のように記されており、稲の観察・スケッチと関連していた。

① 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
② 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
③ 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
④ 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
⑤ 身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

①は、センス・オブ・ワンダー（自然や生命の不思議さに驚く感性）そのものともいえた。②は食生活の中の米という食材に興味や関心を持つということで、やはり関連があった。③④⑤もセンス・オブ・ワンダーと強く関連した内容であることから、稲の観察・スケッチによって学生がこれら領域「環境」の内容を体感しながら学ぶことができることの意味は大きかった。

２）次世代の生命への責任感を育むために

保育や幼児教育に携わる者にとって、保育内容領域「環境」の理論と実践を学ぶことは必要不可欠であるが、一般的な環境問題については、なかなか理解が及んでいない。今回、キャンパスで育つ稲の観察・スケッチを通して、学生は「気候変動」など今日の「環境」問題を、少しは「自分ごと」として捉えることができていないと思われる。

昨今の世界情勢を鑑みると、次世代の生命が持続可能な社会でありつづけるのか心もとない。大人である私たちだけでなく、持続可能な社会の創造に、大学生がどのように貢献できるかについても、今後、検討していく必要がある。

今回の研究では「こども米プロジェクト」実践の一環で、京丹後市と連携を取り、実際の稲作業の体験を通して可能となった「こども米プロジェクト」の活動を振り返り、試行錯誤していく中で、今日の「環境」問題に対する新たな課題や方策のヒントが見つかるのではないかと考えている。

今回は、この研究の途中経過の報告であり、今後は「こども米プロジェクト」参加者へのインタビュー調査も追加で行う予定である。